

平成29年度
入学試験問題

国 語

特待生
前期

受験番号	氏 名

中村中学校

□ 次の(1)～(10)の——線のカタカナを漢字になおして答えなさい。

- (1) 空気をアツシユクする。
- (2) セツソウがない態度をとる。
- (3) 女王ヘイカに歌をささげる。
- (4) 世界的キボの活動に参加する。
- (5) 病人を手厚くカンゴする。
- (6) 同じケイトウの仕事をする。
- (7) シキユウ本部に連絡をください。
- (8) 学級委員をツトめる。
- (9) 料理の腕をフルう。
- (10) かれのしわざだとウタガう。

① 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

(設問の都合上、本文を改変、省略したところがあります。)

*字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

① 「森さんはヤラセをやったことはありますか？」と時おり訊ねられる。そんなとき僕は、その質問をした人が、どんな意味でヤラセという言葉を使ったのかを訊き返すようにしている。

② 事実がないことを捏造する。これがヤラセだ。その多くには、みんなから注目されるとか評判になるとかの見返りがある。ただし、その判定は実は簡単ではない。事実は確かにある。A その事実をそのまま皿に載せても食べづらい。というか皿に載らない。

B みんなが喜んで食べてくれるように調理をする。切り刻む。余分だと思えば捨てる。これが演出だ。

③ ヤラセと演出のあいだには、とても曖昧で微妙な領域がある。そんなに単純な問題じゃない。でも報道したりドキュメンタリーを撮ったりする側についてひとつだけ言えることは、自分が現場で感じとった真実は、絶対に曲げてはならないということだ。そして同時に、この真実はあくまでも自分の真実なのだを意識することも大切だ。同じ現場にいたとしても、感じることは人によって違う。

④ C 胸を張らないこと。負い目を持つこと。

⑤ メディアやジャーナリズムにおいては、これがとても重要だと僕は考える。自分は決して X 的な事実など伝えていない。自分が伝えられることは、結局のところは Y 的な真実なのだ。そう自覚することは、そこから出発すること。だからこそ自分が現場で感じたことを安易に曲げたり変えたりすり替えたりしないこと。

⑥ たったひとつの真実を追究します。

⑦ こんな台詞を口にするメディア関係者がもしいたら、あまりその人の言うことは信用しないほうがいい。確かに台詞としてはとても格好いい。でもこの人は決定的な間違いをおかしている。そして自分がその間違いをおかしていることに気づいていない。

⑧ 真実はひとつじゃない。事実は確かにひとつ。ここに誰かがいる。誰かが何かを言う。その言葉を聞いた誰かが何かをする。たとえばここまでは事実。でもこの事実も、どこから見るかで全然違う。つまり視点。なぜなら事実は、限りなく多面体なのだから。

⑨ あなたのクラスの授業。カメラをどこに置くかで見えるものはまったく違う。先生の立っている場所にカメラを置く場合と、クラスの問題児の席のすぐ傍にカメラを置く場合とで、世界はまったく変わる。世界は無限に多面体だ。

10 動物のドキュメンタリーを例に挙げよう。アフリカのサバンナ

で、子供を3匹産んだばかりの母ライオンがいる。ところがその年のアフリカは記録的な干ばつに襲われていて、ライオンのエサである草食動物がとても少ない。だから母ライオンは満足に狩りをする事ができない。飢えている。痩せ細ってお乳も出ない。

ライオンたちもぐったりと衰弱して、もうほとんど動けない。

11 このままでは家族全員が餓死してしまう。母ライオンは今日も、弱った足を引きずりながら狩りに出る。もしも今日も獲物を発見

できなければ、子供たちはみんな死んでしまうかもしれない。そのとき母ライオンは2匹のトムソングゼルを発見した。大きなほうは無理でも小さいほうならば、弱った自分の足でも捕まえることができるかもしれない。

12 母ライオンはじりじりと、2匹のトムソングゼルににじり寄っ

てゆく。その場面を観ながらあなたは、何を思うだろう。きっと手に汗握りながら、がんばれと思うはずだ。がんばってあのトムソングゼルを仕留めて、巣で待つ3匹の子ライオンにお乳を飲ませてやってくれ。命を救ってくれ。

13 ここで場面は変わる。今度は群れから離れてしまったトムソン

ガゼルのドキュメンタリーだ。干ばつで草がほとんどない。母親と生まれたばかりのトムソングゼルは、サバンナを長くさまよい

ながら、必死に草を探し求める。やっと草を見つけた。2匹は無

心に草を食べる。その時カメラのレンズが、遠くからじりじりと近づいてくる痩せ細った雌ライオンの姿を捉える。その視線は明らかに、子供のトムソングゼルを狙っている。

14 この場面を観ながら、あなたはきつと、早く逃げろと思うはずだ。早く気がついてくれ。今なら間に合う。あの凶暴なライオンから逃げてくれ。

15 これが視点だ。どちらも嘘ではない。でも視点をどこに置くかで、世界はこれほどに違って見える。

16 物事にはいろんな側面がある。どこから見るかでまったく変わる。あなたは普段、父親や母親の言いつけをよく守る子供であるとする。でも今日夕ご飯を食べながら、「最近あまり勉強していないんじゃない？」と母親に言われて、思わず口答えをしてしまったとする。このときの口答えの理由は何だろう。

17 ある人は、「あの子は最近お母さんが口うるさいと思っていららしていたんだよ」と言う。また別の人は、「自分ではやっていくつもりだったから、お母さんはわかってないと思ったんだ」と言う。またもう一人の人は、「実は最近、自分でも確かに勉強時間が足りないと思っていたので、つい反抗してしまっただよ」と言う。「別の心配事があってそれが気になっていて、思わず口

答えしてしまったのさ」と説明する人もいるかもしれない。

18 あなたの本当の心情は僕にはわからないけれど、でも少なくとも、

I

事件や現象は、いろんな要素が複雑にからみあってできている。

どこから見るかで全然違う。

80

19 さまざまな角度の鏡を貼り合わせてできているミラーボールは、

複雑な多面体によって構成される事実と喩えることができる。で

もこれを正確にありのままに伝えることなどできない。だからメ

ディアは、どれか一点の視点から報道する。それは現場に行った

記者やディレクターにしてみれば、事実ではないけれど（自分の）

真実なのだ。

85

20 視点を変えれば、また違う世界が現れる。視点は人それぞれで

違う。だから本当は、もっといろんな角度からの視点をメディア

は呈示すべきなのだ。いや、提示されるはずなのだ。

90

21 でも不思議なことに、ある事件や現象に対して、メディアの論

調は横並びにととても似てしまう。なぜならその視点が、最も視

聴者や読者に支持されるからだ。

22 だからあなたに覚えてほしい。事実は限りない多面体であるこ

と。メディアが提供する断面は、あくまでもそのひとつでしかな

いということ。もしも自分が現場に行ったなら、全然違う世界が

95

現れる可能性はとても高いということ。

23 自分が現場で感じた視点に対して、記者やディレクターは、絶

対に誠実であるべきだ。なぜならそれが、彼が知ることができる

唯一の真実なのだから。でも現実はそうじゃない。

（森達也『たったひとつの「真実」なんてない』）

200

※捏造……事実でないことを事実のように仕立てること。でっち上げ。

※ドキュメンタリー……事実を記録した作品。

※メディア……ここでは、テレビ、新聞、雑誌などのこと。

※トムソンガゼル……草食動物の一種。

問一 [A]、[C] に入る語を次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア、あるいは イ、だから ウ、つまり エ、でも

問二 [X]、[Y] に入る、反対の意味をもつ熟語の組み

合わせとして適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、X 現実 Y 理想

イ、X 理想 Y 現実

ウ、X 客観 Y 主観

エ、X 主観 Y 客観

問三 —— 線①とありますが、「自分が現場で感じたことを安易

に曲げたり変えたりすり替えたり」^{くま}することを、筆者は何と

表現していますか。本文中から一語でぬき出しなさい。

問四 —— 線②とありますが、「この人」がおかしている「決定

的な間違い」とは何ですか。解答らんにあうように答えなさい。

() と思ってしまうこと。

問五 —— 線③「カメラ」は何を比喩的に表現したのですか。

[8]段落から一語でぬき出しなさい。

問六 —— 線④について、次の各問いに答えなさい。

(1) [10]段落と[14]段落の「動物のドキュメンタリー」の例には二

つの「視点」が書かれています。「の視点」に続くように、

A・B二つに分けて、それぞれ二十字以内で本文中からぬき出しなさい。なお、A・Bの順序は問わないものとします。

(2) (1)で答えたA・Bに視点を置いた場合、この「動物のドキュ

メンタリー」を見た人はそれぞれどのように感じますか。本文中の語句を用いて、説明しなさい。

問七

I

に入る内容として、適当なものを次から一つ選

び、記号で答えなさい。

問八

本文における筆者の考えとして適当なものを次から一つ選び、

記号で答えなさい。

ア、どれかひとつは正解があるはずだから、全部間違っている

ことはないんじゃないかな

イ、どれかひとつだけが正解であとは全部間違っているという

ことはないんじゃないかな

ウ、どれかひとつしか正解はないから、あとは全部間違っている

んじゃないかな

エ、どれかひとつだけが間違っていてあとは全部正解だといっ

ていいんじゃないかな

ア、事実を全ての視点から見えてありのままに伝えることはでき

ないので、現場を取材する人は、それを自覚した上で自分

が現場で感じた視点に対して誠実に報道したり番組を作っ

たりするべきだ。

イ、どの視点で見るかで世界は大きく変わるため、メディアが

報道したり番組を作ったりするときは、あらゆる角度から

多面的にその事実を見て、それをそのまま正確に伝えなく

てはいけない。

ウ、事件や現象は複雑にからみ合っているため、現場を取材す

る人は、自分の視点にとらわれて間違いを報道することが

ないように、たった一つの真実を正確に伝える努力をしなく

てはいけない。

エ、見る人によって感じることも全く異なるので、メディアは、

どのように伝えたら視聴者や読者が喜ぶのかということ

第一に考えて、番組を作ったり報道したりするべきだ。

問九 筆者の考えをふまえて、あなたはメディアが提示するテレビ

番組を見たり新聞を読んだりする際に、どのようなことに気をつけたと思いますか。なぜそう思うかの理由も明らかにし、あなたの考えを書きなさい。

〔三〕 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

(設問の都合上、本文を改変、省略したところがあります。)

*字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

「ぼく(リアスカ)」「飛鳥井渡」と「リアル」(秋山璃在)

は幼なじみである。二人が小学一年生の時、リアルの弟リズム(璃澄)が海で亡くなる事故が起き、リアルの母はショックから入院してしまった。五年生になって、ぼくとリアルは同じクラスになった。勉強も運動もでき、クラスのリーダー的な存在であるリアルをぼくは「まぶしすぎる存在」だと感じている。二人は仲良くなった転校生の川上サジから「話がしたい」と呼び出された。秘密にしていたことを告白しあう「バクロ大会」だと思ったリアルは突然、「おれさあ、死ぬのがこわいんだよなあ」と話し出した。

「あのさ、おれいつも考えてるんだけど、たとえば飛行機が落ちたり、船が沈没したり、大地震がきたり、重い病気になったり、いじめで自殺したり、ヘンシツシャに殺されたり、戦争に巻きこまれたりして、みんな死ぬじゃん。子どもでも死ぬんだよ」

そしてリアルは深刻な声でつぶやいた。「不公平だよなあ、ホント」

「だけど、うちのオヤジはいうんだ。不公平だけど、ひとしく不公平だっていう点では、みんな公平なんだって。そんなのって、おれ、ただのへりくつだと思うけど、でもそれが世の中の真理なんだって。」

正義が勝つとはかぎらないし、幸せや不幸が平等とはかぎらない。

そんな中で平和に生きてるって、超ちやうすげえことなんだぜ。奇跡きせきな

10

んだぜ。死んだらなんにもなくなっちゃまう。からだも気持ちも、なくなるんだ。それってさ、よく考えると、すっげえこわくねえ？

どうしてみんなふつうにしているんだよ。明日死あしたんじやうかも

しれないってのにさ、だれかがくだらないことやってたり、人を傷

ついたり、時間ムダにしたりしてるのを見ると、腹がたつっていうか、

15

ばかみたいって思うんだ。でもおれだってたまにそういうことしちゃってるから、そういうのに気がつくマジでいやなる」

① リアルは一気にそこまでいって、不安そうな表情でぼくとサジを

見た。

「ねえ、リアル。人間の死亡率は百パーセントなんだって知ってる？」

20

サジがそういったけど、ぼくにはあんまりピンとこなかった。で

もリアルは真剣しんけんな顔かおでうなずいている。

I Ⅰ でもいつ死ぬかはわからない

いんだ。明日死ぬかも」

「リアル、さっきから明日死ぬかもっていうけど、もしかしたら五

25

十年後かもしれないし、八十年後かもしれないんだよ」

「八十年後っていうコンキョはないだろ。明日かもしんないじゃん」

「明日だっというコンキョだっでないよ」

「まあそうだけど」

リアルは肩かたをすくめた。堂々巡どうどうめぐりりだ。

30

「とにかく、そんなにこわがらなくてもだいじょうぶだって。だってリアルが死ぬときは、たぶんいまのリアルとはちがうリアルになっているから」

「ちがうおれって？」

「そのときのリアルは、死ぬことをそんなにこわいと思わないかも

35

しれない。いい人生だったって、そろそろ死んでもいいかなって、そう思っているかもしれない。ぼくのひいおばあちゃんはそうだったよ。亡くなったとき、とっても幸せそうだった。もう大満足って

かんじ」

リアルは目を大きくして、サジの言葉を受けとめていた。

40

「そんなふう考えたことなかった」

ぼくもだよ、リアル。

死ぬことは、もっと暗くて、こわくて、不幸なものでしかないと思

ってた。だけど、そうじゃない可能性だってある……？

よくわからないけど、もしかしたらそうなのかもしれない。

45

サジのその考えかたは、ぼくたちにとってはとても新鮮しんせんだった。

リアルがかかえつづけてきた、そしてぼくが逃にげつづけてきた、答

えの出ないむずかしいその問題に、サジはそんなふうになぐさめを

与えてくれた。まるで暗やみの中にひとすじの光が差したような、

それはあたたかく心強い「希望」だった。

「サジが知ってるかどうか知らないけど、おれの弟って、四年前に事故で死んじゃったんだ」

サジがぼくのほうをちらっと見たので、ぼくが先にリアルにいった。

「ごめん、ぼくがサジに教えた」

「そっか。だよな。どこまで話した？」

「小さいときに死んじゃったって。それだけ」

「それだけかよ」

ぼくだってそれ以上のことはそんなに知らない。海の事故だったってことだけだ。

リアルがぼくたちに事故のことを話そうとしている。ぼくは

Ⅱ てリアルという言葉を待った。

「海でさ、あのときおれたち砂浜すなはまにいたんだけど、いつのまにかぬいぐるみが波に流されたらしくて、それを追いかけてっておぼれたんだって。……だけどあの事故、じつはおれのせいだから」

「え？」

思わずぼくは声をあげた。

そんなぼくの反応はんのうを見て、リアルは

Ⅲ た。

「やっぱ知らなかったのか。おじさんたち、アスカにはいわなかつ

たんだな。たぶんそうなんだろうって思ってたから、なんとなくおれもずっといえなかった」

「なに、どういうこと？」

「あのときリズムの近くにいたの、おれだけだったんだ。オヤジは海の家うみのいえに買いものに行って、かあさんは近くにいたけど、昼寝ひるねしてた。リズムのこと見てるんだぞって、おれ、オヤジからたのまれてたんだけど……」

そこまでいって

Ⅳ

たリアルが、そのときのことを思い出しているのがわかった。

とりかえしのつかないことが起きてしまったときの、あせり、恐怖きょうふ、そして絶望。そんなリアルのなまなましい感情が、ぼくと

サジの心の中につきささるように流れこんでくる。

ぼくもサジもせかしたりせず、リアルが口を開くのをただ待っていた。ぼくには待つことしかできないけど、おまえがしゃべりたくなるまで、ずっと待ってるよ。そう思いながら待っていた。

やがてリアルはしゃべりはじめた。

「オヤジにそうたのまれてたんだけど、おれ、砂でトンネル作るのに、夢中になっちゃってさ」

ホントはかだよな。リアルがつぶやくようにいった。

「これ、だれかにいうのはじめてだけど」

声を無理やり明るくさせて、リアルルの告白は続く。

「あのおきおれ、かあさんからすげえせめられたんだぜ」

90

リアルルは自分の首をつかむようなしぐさをしてみせた。

「こうやって、首んどこつかまれてさ、なんでちゃんと見てなかったのって。こえーだろ。自分は寝てたくせにさ」

そんなことがあったのか。だけどそれは……。

ぼくが思ったこととおなじことを、サジがすぐ口にした。

95

「リアルル、それはおばさんだってショックだったから、そんなこといっちゃったんだよ。リアルルのせいじゃないって、ほんとうはわかってるよ」

③
リアルルがおばさんに会いにいかない理由が、なんとなくわかった気がした。そして、それはきつとまちがっているってことも。

100

リアルルが一步踏み出したなら、ぼくも一步踏み出さなきゃいけない。

ぼくはリアルルとむきあった。

「リアルル、おばさんにあんまり会いにいったないんだって？ 会いたくないの？」

「だからおまえ、おれの話きいてた？ おれがどうこうじゃなくて、

105

かあさんがおれの顔なんか見たくねえんだって」

「ぼくはリアルルの気持ちをきいているんだ」

リアルルは「おっ」という顔でぼくを見た。その横でサジがリアルル

を見つめている。

ぼくの問いかけに、リアルルは上をむいて考えはじめた。

「うーん。そりゃ、やっぱり会いたいよ」

「で？ ほかにもなんかあるだろ、おばさんに対して思ってること」

「そうだなあ……。早く元気になって、うちにもどってほしいとか？」

「うん。でも、それだけじゃないだろ？」

ほかにももっとたくさんあるはずだ。ぼくはそれを、おまえの口からちゃんとききたい。

リアルルはぼくの目を見た。口に出していいのかどうか、迷っているみたいだった。

④
いいんだよ、リアルル。

120

おまえにおとなの顔をさせるのは、もういやだ。

そしてリアルルはようやく口を開いた。

「おれはかあさんに、前みたいに笑ってほしい」

「うん。それと？」

「ごはん作ってほしい。できればお菓子かしも」

「そうだよ。あとは？」

125

「試合を見にきてほしい。参観日にもきてほしい。いっしょに旅行にいきたい。あの事故がなければふつうにしているはずだったことを、全部したい」

110

そこまでいって、リアルはぼくから顔をそむけた。「あと」

130

「自分ばかり病気になるかなってんじゃないかねって、正直ちょっと思ってる」

ふーっと、リアルは息を吐いた。そうだ、そうやって全部はきだせばいい。おまえは自分の気持ちをあとまわしにしすぎなんだよ。

リアルは不安そうにぼくたちの顔をうかがっている。

135

「最悪だよな。ケーベツした？」

「最悪なんかじゃないし、ケーベツもしてないよ。な、サジ」

サジは大きくうなずいた。「するわけない」

「リアルはもっと親にあまえたほうがいいんだって、うちのとうさんがいったんだ。ぼくもそう思う。だけど、ぼくたちがみんななり

140

アルをたよりにしすぎるから、すごいやつだって決めつけるから、それがいけないんだよな」

⑤ そうだ、ぼくはわざと見ようとしなかったんだ。

リアルはとにかくすごいやつ。あんなことがあっても、ちゃんと立ち直っている。ぼくなんかとは、もともとぜんぜんちがうんだ。

145

そんなふうに、リアルのことを手に負えないくらいすごいやつだと思うことで、ぼくはいつも自分を守ろうとしていた。

リアルに弱点がないわけじゃない。リアルの弱い部分から、いつもそうやって目をそらしていたのは、ぼく自身だ。

「ごめんな、リアル」

リアルがぼくの後ろを歩きはじめたときも、わすれものばかりするようになったときも、ぼくは「どうして」ってきいてやれなかった。

ぼくにできたこと、ほかにもきつとたくさんあったよな。

ごめん、リアル……！ ほんとうにごめん。

もうおそいかもしれないけど、いま、おまえに伝えるよ。

155

「おまえがそんなにすごいやつじゃなかったって、ぼくたちはリアルのががちゃんと好きだよ」

まわりのおとなたちも、きつとみんなそう思ってる。うちのとう

さんも、かあさんも、かいいい甲斐先生も、もちろんおじさんだって、きつと。

知ってたか？ おまえがかんべき完璧なやつになればなるほど、まわりは

160

ときどき身動きがとれなくなるんだ。ぼくもそうだったし、もしかしたらおばさんもそうなのかもしれない。

だからそんなにすごいやつにならなくていい。がんばりすぎなくていい。泣きたいときは泣けばいいし、つらいときは逃げればいいじゃん。

165

だってリアル、ぼくたちまだ子どもなんだよ。甲斐先生がぼくに教えてくれたんだ。リアルだってぼくとおなじ、ふつうの五年生なんだって。

「あ、リアル……」

サジがおどろきの声をあげる。

声を出さずに、ぼくをじっと見たまま、リアルは泣いていた。

リアルが泣いてる。あのリアルが、泣いている。

ぼくはきいたことがある。クラスでだれかが泣いていたら、最初に気がつくのはいつもリアルなんだって。

だけどリアルの涙を見たことがあるやつは、きっとそんなにいない。

ぼくだってひさしぶりに見た。最後に見たのは幼稚園のころだ。車のおもちゃの取り合いで、派手にけんかしたんだよな。

あのころぼくたちは小さな子どもだったけど、いまだってまだまだ子どもなんだ。

とうさん、スーパーリアルの仮面がはがれたよ。

「泣くなよ」

ぼくがそういうと、リアルは泣きながらちよっとだけ笑った。

「おまえが泣かせたんだろ」

リアルは手のひらで涙をぬぐった。

サジがリアルにポケットティッシュを差し出して、なぜかちよっとさみしそうにいう。

「飛鳥井くんにはかなわないや」

それはこっちのせりふだ。ハンカチとかティッシュとか、なんでいちいち持ち歩いているんだよ。準備万端か。

185

180

175

170

リアルはちよっと考えて、

⑥ 「もしかしたら、おれ、アスカにそういうこと、いつてほしかったのかも知らないな」

そしてぼくにむかって、

「ありがとう」

⑦ といった。

それは、いままでもらったどの「ありがとう」よりも、ぼくにとつては特別な「ありがとう」だった。

(戸森しるこ『ぼくたちのリアル』)

195

190

問一 ～～～～線ア「不公平」のように上に「不」をつけることがで

きる熟語を次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、完成 イ、公式 ウ、関心 エ、衛生

問二 ——線①について、リアルはなぜ「不安そうな表情」をし

たのだと考えられますか。ふさわしくないものを次から一つ

選び、記号で答えなさい。

ア、自分の思いに影響され、二人も死をこわがる気持ちにと

らわれてしまうかもしれないと考えたから。

イ、自分が話した考えについて、二人が理解を示してくれない

かもしれないと心配したから。

ウ、自分の死に対する深刻な思いや恐れを、二人が受けとめて

くれるかどうか分からなかったから。

エ、自分の思いを一気にぶつけたことで、二人の気持ちが遠ざ

かっていくのではないかと思ったから。

問三 に入る言葉として適当なものを次から一つ選び、

記号で答えなさい。

ア、そういう当たり前のことを言うなよ！

イ、そんなことはどうでもいいだろ？

ウ、死なない人間はいないってことだろ？

エ、だからおれはこわいと言っているんだ！

問四 ——線②を説明した次の文の に入る

適切な言葉を、本文中からそれぞれぬき出して答えなさい。

リアルもぼくも「死」について (十四字) と

しか考えていなかったが、もしかしたら実際に死を迎える時に

は (七字) とか、 (十二字) と

思っている可能性があると言われ、死を恐れるばかりでなくて

もよいかもしれないと気づかされた、ということ。

問五 [Ⅱ] [Ⅳ] に入る言葉を次からそれぞれ選び、記

号で答えなさい。

ア、肩をすくめ

イ、目を皿にし

ウ、息をつめ

エ、口を閉じ

問六 —— 線③とありますが、リアルはなぜこれまで母に会いに行

行かなかったと考えられますか。五十字以内で説明しなさい。

問七 —— 線④とありますが、「ぼく」はリアルにどうしてほ

いと思っていると考えられますか。次の文の [1]

[2] に適切な言葉を入れて答えを完成させなさい。

[1] は本文中の十二字の言葉が入ります。 [2] は

「本音」という言葉を用いて自分で考えて書きなさい。

今まで [1 (十二字)] にしてきたリアルに、

[2] と思っている。

問八 —— 線⑤について、「ぼく」は何を見ようとしなかったと

いうのですか。本文中から八字でぬき出しなさい。

問九 —— 線⑥について、「そういうこと」とはどのようなこと

ですか。次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、あまりに完璧だと周りも身動きがとれなくなるということ。

イ、もう泣くのはやめて前を向いてほしいということ。

ウ、何でもできるすごいやつでなくてもよいということ。

エ、入院中のお母さんに会いにいった方がよいということ。

問十 ——— 線⑦とありますが、なぜ、この「ありがとう」が「ぼ

く」にとって特別なものに思えたのですか。その理由として
ふさわしくないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、今まで泣かなかったリアルが泣き、「ありがとう」と言っ
てくれたので、今までよりもリアルと深くわかり合えた
と思えたから。

イ、いつでもおとなの顔をするリアルが、泣いてお礼の言葉を
言ったので、はじめてリアルよりも優位に立てたと思えた
から。

ウ、完璧に見えたりリアルの心の弱みに、自分が励はげましの言葉を
かけてあげられた、そのことに対するお礼の言葉だったから。

エ、リアルがおとなの顔から「ぼく」と対等な五年生の顔にも
どり、はじめて素直すなおな気持ちで言った「ありがとう」だと
思ったから。